Vol.170　中国、九州、四国、3,600キロの旅の中から ～Ｐａｒｔ１～　（平成21年10月25日）

不況、配慮なき大型店の出店の中で、君津の中小小売業、生産者、そこで働く人たちは今後、どう生き残っていくかは私達に与えられた大きな課題であります。

稼働率８０％をすでに超えたと伝えられる新日鉄、アクアライン料金引き下げによって房総路への観光入込人口はおよそ３千万人と予想されております。観光客の一人あたりのＧＤＰは１万円と言われます。これは飲食、宿泊代でなく、交通の安全サービス、施設費も含めた数字であります。

観光とは風物、名物を楽しむだけでなく、給油車の整備、タクシー、レンタカー、衣料、ガイド、建設以外と総合産業であります。

それではと一念発起して10月10日の早朝、君津を立って東名から新名神へと走り、最初の街は狸の焼き物でいっぱいの信楽の町を見物して、夕方備前の宿へ入りました。翌11日は、津和野から萩へと日本海を右に西長門の美しい落日を見ながら関門橋を渡り、八幡帆柱のホテルに着いたのは７時を過ぎていました。次の13日は唐津からオランダ伝統の多い平戸をめぐって伊万里から松浦党の根拠地で知られた町に泊まる。翌14日は長崎を縦断、島原雲仙を横目で見ながらフェリーで天草へ着きました。天草松島では同行の方が60年ぶりに育ての親と再会され、村中の方々の親切に迎えて下さり、感激のドラマとなりました。三角半島を長躯して、この旅では久しぶりに一杯やって熊本でグッスリと眠る。翌15日は南下して高千穂峡延岡で反転し国東半島の摩崖佛を巡拝、湯布院で遊び黒川温泉に無事辿り着きました。16日、同行者達のふるさと、竹田、牧口、大野川を渡り臼杵大仏を後に大型フェリーで四国八幡浜に渡り、松山、高松を走り抜けて、夕陽の鳴門大橋に大歓声をあげ、淡路島で一泊、瀬戸の真鯛で乾杯。翌朝、明石海峡大橋に上がる朝日に無事を感謝し午後４時行程3,600キロの車の旅は終わりました。

『この旅で気付いた事いくつか・・・』

①人気のある温泉地は大型資本のホテル、施設がなく地元の人たちに自信と活気がありました。
（例）湯布院、黒川温泉、城崎温泉ら

②旅のＧＤＰ（私はツアーが嫌いで、ほとんど車の旅になりますが）インターネット上で計算された有料道路は凡そ６万円でしたが、土日が３日あったので、23,000円、燃料代は凡そ６万円、食費は予算の半分位ですみ、７泊８日１人当たり凡そ９万円、１日当たり11,250円でした。

③①以外の観光地は駅前に設備のある大型のビジネスホテルがあって、平均一泊3,250円、朝夕食無料サービスでしたので従来の旅館、ホテルはほとんど休廃業状態。

④商店街、従来型の商店街は何処も駄目でした。湯布院は女性対象の小物土産店が多く賑わっていました。城崎温泉は泊、食、土産店は分業して成功、特に観光では女性の方達が買い物を楽しめる工夫が大切だと感じました。

⑤私の旅はカーナビを使わない「鶴瓶の家族に乾杯」と同じ旅ですので道を聞くと　車で案内して下さった方３人、自転車の方が２人、育ての親を訪ねた時、村中の人が歓迎してくれた人情に、またいつかの思いが残りました。

⑥「道の駅」は全国で12,000店あるセブンイレブンを超えました。旅人達の人気がある証拠です。君津も増設して下さい。

⑦水俣病のあった地域は全くさびれた風景でした。観光には環境が極めて重要だと教えられました。